
魔法少女リリカルなのは ～ 黒衣の死神 ～

ハザマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 〵 黒衣の死神〵

【Nコード】

N7025V

【作者名】

ハザマ

【あらすじ】

反逆者はアルハザードに自分の命と力を封印した。自分の息子の双子だけを助けアルハザードから脱出、一人は何処かの惑星もう一人は地球に、地球に降り立った彼は何をするか破滅か、或いは……。

注意 自分は小説を書くのは初めてです。この小説にはパクリ技やパクリ武器とか出てきたりします。勿論オリジナル武器やオリジナルの人や技もできます。あと主人公はいちお最強、転生者は出て

きません。それでもokな方は、よろしく願いします(^o^)

其では魔法少女リリカルなのは始まります。

く無印篇く

彼は小さな部屋にいた。

小さな部屋にはベッドだけが置いてあり、そこに彼は寝転んでいた。ベッドの横には愛用の黒と白の改造銃が置かれ足下には親父の形見でもある剣リベリオンが置かれていた。

彼は天井を見ながら

「暇だ、仕事がしたい」

と呟いた。

『旦那、折角の休みなのにそんなこと言うなよ』

返ってきた言葉は、俺の剣リベリオンだ、何故リベリオンが喋るのかは知らないがこいつと喋るのは嫌いじゃあない、まあ最初に喋り懸けられたときは流石にびびった。

「仕方無いだろ、いくら休みでもやる事が無ければ暇になる」

『まあ、確かになこの部屋出られないもんな、仕事以外しか出ることを許されてないからな』

そう、この部屋から出るのは仕事するときしかない。

一度だけ出たことが合ったけどそのときは道が全然解らなくて結局

見つかつて連れ戻された。

その時上の連中に言われたのが「次出たら殺す」だからなたった一回くらい許せよとか思ったよ俺。

「まあ、まだ諦めてないけどね」

『懲りないね〜旦那も』

「!」

その時廊下から足音が聞こえた。

「休みは終わりだなこりゃ」

だが俺は残念がらずやっと暇から解放されると内心ワクワクしていた。

そしてその足音は俺の部屋の扉の前で止まり扉が開いた。

そこにいたのは青いスーツに白い白衣を着ていて紫色の髪で金色の色の眼をした男がたっていた。

この男は、この世界での俺の友人ジェイル・スカリエッティだった。

「楽しい休暇は終わりだよ」

第1話 仕事（前書き）

頑張って更新するぜ（＾Ｏ＾）

第1話 仕事

「俺が今楽しく休暇過ごして見えるようならその視力を治すのをオススメするぜ」

「そうかい？それでも視力はいい方なんだけど、今度視力検査をして悪かったら治そう」

「冗談が通じない男は女に嫌われるぜ」

こいつは冗談が全然通じないからなまあ嫌いじゃあないけど

「話はこのぐらいにしてそろそろ仕事の話を」待つてました！！」
最後まで聞いてくれないか？」

俺はジェイルの話を最後まで聞かず準備をする。

俺は壁に掛けていた漆黒のコートを着て足下にあるリベリオンを担ぎベッドの横に置いてある二丁拳銃をホルスターに入れ準備を終える。

「さあジェイル準備出来たぜ相手は誰だ」

振り返るとジェイルは少し呆れている顔をしていた。

「？どうしたジェイル」

「話は最後まで聞いてほしいな」

「？」

確かにいつも話は最後まで聞かないがジェイルはいつも「まあいいか」と終わらせる。

だが今日はいつもと違うようだ。

「今日の仕事はいつものとは違うからね」

「いつもと違う？」

「そうだよ、仕事の内容はある一人の少女に家庭教師をしてもらいたい」

「なに？」

家庭教師をしてもらいたいだとなんの資格もってない俺に上の連中はなにを考えている。

「あ、別に勉強を教えてやれとかじゃないから戦闘の仕方と魔法の使い方とかを教えてあげればいいから」

「断る、俺は人に教えることは何もない」

「断ることは出来ないよ、上からの命令は絶対だからね」

「やればいいんだろ」

「そういつてくれると私は嬉しいよ、詳しいことは上の人に聞くといい」

はい、何だか面倒臭そうな仕事だぜ。

ある会議室の扉前

俺とジェイルは会議室の扉前にいる。

コンコン

いちおノックだけはしておく。

「はい」

「邪魔するぜ“委員会”」

「失礼します」

俺は少し乱暴に入りジェイルは礼儀正しくお辞儀して入る。

「私はまだ、はいとしか言っていないぞ」

「んなこと気にすんなよ爺さん禿げるぜ」

この委員会の中でも一番偉い爺さんに向かって暴言を吐く。

「相変わらず口の減らん餓鬼め」

委員会、構成たった十人で作り上げた犯罪組織

犯罪組織の中でもかなりの者らしいA級？S級位だったかな？

結構管理局が捜しているらしいが苦戦しているらしいあのジェイルすら場所を知らないらしい。

「其が俺の取り柄だからな、てか相変わらずホログラムかよ、いつも言ってるだろ俺と話したいなら」

「恐れ多いぞ小僧」

割り込んできたのは爺さんの右腕と言われている奴名前なんて知らないけどな

「爺さんの右腕俺は爺さんと話しているんだ勝手に話に割り込まないでくれ、ママに言われなかったか人が話しているとき割り込んだらいけませんってな」

「貴様！！殺す」

「おいおい、ホログラムで俺をどうやって殺すんだよ」

「やめいそれ以上この会議室で騒ぎ立てるのなら貴様らを永久牢獄に閉じ込める」

「はいはい、これ以上は喋りませんよ」

「失礼しました、我が主」

其からずっと右腕に睨めていた俺、おぉー怖い怖い。

「では仕事の内容を伝える、お前は此から時の庭園に向かつてもらうそこで貴様は“プロジェクトF”の失敗作に実践に出れる程の戦い方を教える以上だ」

「プロジェクトFの失敗作？何だよそれ」

「詳しい説明は、ジェイルに聞け以上、アウト」

そして奴等は一方的に切りやがった。

「また、ジェイルに全て聞けかよ、うぜえ、其じゃあジェイル教えてくれ」

俺は後ろにいるジェイルに聞いた。

「それじゃあ依頼主は誰だ？」

「プレシア・テストロッタ」

「じゃあ、プロジェクトFってのは？」

「プロジェクトF、正式名はプロジェクトF・A・T・Eこの話をするなら少し長い昔話に付き合ってもらうけどいいかい？」

「構わない」

「プレシア・テストロッタは私と同じ研究員である研究をしていた」

「ある研究？」

「新型の大型魔力駆動炉の開発」

「だが事件が起きた実験の失敗だ、話を少し戻すけど彼女には、たった一人の愛娘アリシア・テストロッタがいた」

「その実験に巻き込まれた」

「正解、それで彼女は悲しんだ、そして彼女は一つだけ愛娘を助けることが出来る方法を思い付いた」

「プロジェクトF・A・T・Eか」

「またまた正解、愛娘の細胞を使いアリシア・テストロッタの記憶を植え付け、実験は成功しもう一人のアリシア・テストロッタが生まれた、名前をフェイト・テストロッタ」

「待て、爺さんは失敗作と言っていたが」

「実験は一応成功したよ、けどフェイト・テストロッタはアリシア・テストロッタの全てをコピーした訳じゃあないんだ」

「それぐらいで失敗って科学者の考えは解らないわ」

「科学者のほとんどは欠陥とゆう言葉は嫌いなんだ“完璧”と言う言葉が好きなんだよ、勿論私もその一人だけだね」

だいたいの話は解った、だが何故フェイト・テストロッタに教育をしなければならぬ？

「そんなこと解らないよ」

「人の考えを読むな」

「顔に出ているんだよ、上の人達は何を考えているのかは解らないがそんなこと考えずに仕事に集中したら」

「……………そうだな」

確かにそんなことを考えずに仕事だけに集中するか

「それよりその服装で行くきかい？その服装で行ったら流石にヤバイよ」

確かにこの服装で行って管理局にばれたら流石にヤバイ。

仕方ないあの服装で行くか

ジェイル・スカリエッティの研究所

「うん、その服装なら大丈夫かな？」

今の俺の服装は黒いブーツを履いていて青いジーンパンを履き白いカッターシャツを着てその上に腰ぐらいまでの黒いジャケットを着ている。

「いつもの服装じゃないからなんかしっくりこないな」

「すぐ馴れるよ」

「そういえば、俺が頼んでいたデバイスはまだか？」

「あれかい、残念ながらまだだよ」

「そうか」

「あれを作るの結構難しくてね」

「まあそうゆうふうに設計したからな」

「酷いな、……転送の準備出来たよ」

「やっと転送の準備が出来たようだな。」

正直教育の仕事は気が乗らないが折角の仕事だ楽しむとするか。

「場所、時の庭園、それじゃあね“カオス”」

「おう、じゃあな」

第1話 仕事（後書き）

スカリエツティってこんな口調だっけ？

第2話 出会い（前書き）

フェイト、リニス、アルフの初登場！！！！

第2話 出会い

俺は今時の庭園と言われている場所にいる。

見たところ辺り一面に草原が広がっていた。

「こいつは驚いた、なかなかいい場所じゃないか」

『旦那此処で昼寝したら凄く気持ちいいだろ絶対』

「あの？」

「そうだな、少し昼寝していくk」「あの!!」

カオスは声がした方へ振り向くとそこには帽子を被り薄い茶色の髪で白い服を着た女がいた。

「貴方がお仕事を手伝ってくれる方ですか？」

「ああ、そうだが」

「そうですか、私プレシアの使い魔のリニスと申します」

リニス s i d e

私はプレシアに二日後にフェイトの教育係が来るから迎えに行くよう頼まれました。

嬉しい部分もありました。外部の人が来ることで外の世界の事が知ることができるからです。

ですが内心は少し嫌だなとの部分もありました。教育係と言うことはフェイトに魔法を教えると言うことになるからです。

フェイトが実践に出れるようになり、今私がつっているデバイス“バルディシュ”が出来たら私もう必要がなくなるからです。

正直私はまだフェイトとまだ一緒にいたいです。

「リニスどうかしたの？気分が悪いの？」

フェイトの方を見ると悲しそうな目で私を見ていました。

「いいえ、少し考え事をしていただけですよ」

この子を悲しませてはいけないと私は思い笑顔で答えた。

「考え事？」

「はい、今日プレシアに呼ばれていたんですよ」

「母さんに」

「ええ、何でも二日後に新しい教育係が来るとのことですよ」

「新しい人なら女の人がいいな」

「残念ながら性別は男の人でしたよ」

「うつつ、男の人が会ったことがないから怖いな」

フェイトは嫌そうな顔で此方を見てきた。無理もないこの時の庭園は女の人しかいませんからね。

「大丈夫だよフェイト、もしもそいつがフェイトを虐めるようならあたしがそいつをぶっ飛ばしてあげるよ」

彼女はフェイトの使い魔アルフ子浪の頃に死病にかかり、死にかけているときにフェイトに拾われ、命を救う手段として仮契約をし使い魔となりました。

「だ、だめだよアルフそんなことしたら」

「そうですよ、アルフ喧嘩をしたらその日はご飯抜きですからね」

「うつ……解ったよりニス喧嘩はしないからご飯抜きだけはやめておくれ」

「解ったならいいですよ、けどフェイト私も心配です」

「大丈夫だよリニス、それに母さんが折角頼んだからその期待に答えなくちゃ」

「フェイト」

フェイトは笑顔で答えた。私はいつまでこの子の笑顔を見ることが

できるのだろう。

そして二日後

私は待ち合わせの場所にいる。

少し遅いが彼にも都合と言うものがあるのだろう。少し待っていたら目の前に彼は現れた。

黒い髪の少年？青年？の人がいる。黒いジャケットを羽織っていて背中には禍々しいオーラを放っている剣がある。

「こいつは驚いた、なかなかいい場所じゃないか」

私は彼の最初の第一声聞いた。聞いた限りではいい声をしている。

『旦那此处で昼寝したら凄く気持ちいいだろ絶対』

剣が喋った！！いやこれは多分彼のデバイスなのだろう。彼は私をそっちのけで、デバイスと喋っていた。彼は私にきずいているのだろうか？彼に声をかけてみよう。

「あの？」

「そうだな、少し昼寝していくk」「あのー！！」

彼はやっと私の存在にきずいたのか、此方を振り返ってきた。

彼の顔を見たところ綺麗な顔立ちをしていた。けどまだ少し顔に幼さがあった。本当にこの人がプレシアが読んだ人なのだろうか？一応確認だけはしてみた。

「貴方がお仕事を手伝ってくれる方ですか？」

「ああ、そうだが」

どうやら合っているらしい自己紹介をしなくてはいけない。

「私はプレシアの使い魔のリニスと申します」

少しだけ頭を傾けお辞儀をした。返答が返ってこない。何か私は間違ったのだろうか？恐る恐るお辞儀をした頭をあげたら彼の顔が目の前にあった。

「きゃ」

小さな声をあげ私はバランスを崩し、尻餅をついた。

「あつ、すまない」

彼が手を差し伸ばし私はその手に掴まり立った。だが彼は私をまじまじと見てきた。流石の私でも恥ずかしい。

「……あつ……あの…何か？／＼／」

「いや、貴女が本当に使い魔なのかなと、あつ、尻尾があった本当に使い魔なんだへ」

「使い魔に見えませんでしたか／＼」

「ああ、初めて見たとき可愛いなと思ったよ、どう俺と付き合わない？」

「なっ／＼／」

私は顔が赤くなってしまった

「かつ……からかわないでください／＼」

「からかってないよ、俺は本気」

このままでは彼のペースになってしまう。

「わっ、わたしの名前はリニスです、貴方の名前は！！」

初めてでしたここで大きな声をだしたのわ。彼は少しビックリしていたがすぐにいつもの顔に戻る。

「はは、悪かったリニスだったな俺の名前はカオスよろしく」

「そっ、それじゃあプレシアの所まで案内します」

やっと顔が赤くなるのが引いてきたのでカオスさんにプレシアの所まで案内する。

「あっ、そうそうリニス」

「はい？」

カオスさんが呼んだので振り返ると私の方へ指を指し。

「さっきの答えいつでも待っているから」

と言い私の横を通りました。さっきの答え？「どう俺と付き合わない？」また顔が赤くなるのを感じます。

彼は一体なんなんですかー！。

それが私とカオスさんの出会いでした。

リニス e n d

フェイト s i d e

「早く、起きちゃた」

私の名前はフェイト・テストロット今私は早く起きてしまいました。隣ではかわいい寝息をたてながら寝ているのは私の使い魔アルフ。

「すう……すう……」

私はふと窓の外を見るとリニスがどこかえ向かって行くところを見た。確か今日はリニスが言っていた教育係が来る日だから迎えにく途中だと思いました。

そしてきずいたら私は今リニスの後を折っていた。興味が合った新しい教育係の人はどんな人なのだろうか？。

リニス立ち止まり少しの時間待っていました。今私はリニスから少し離れた所から見ていました。するとリニスの目の前に一人の男の人が現れました。

「あれが新しい教育係さんなのかな？」

少し遠いから男の人の顔が見えませんが背からすると私より年上です。リニスから見たら年上？年下？なのかな？

少しの時間二人を見ていたら何か口論が始まりました。会話は何を言っているのかは解りませんがすると。

「わっ、私の名前はリニスです、貴方の名前は……！」

っ！！初めて聞きました。リニスがあんな大きな声で喋ったのはあの人は一体何者なんでしょうか？

そして二人は母さんの部屋に入っていました。リニスの話を聞くと母さんはお仕事で忙しいから私には会えないそうです。けどいかお仕事が終わったらいつもの優しい母さんが来てくれると私は思っています。

私は自分の部屋に戻り、今日の朝の出来事をアルフに話しました。

「それでね、リニスが大きな声を出したんだ」

「へえ、あのリニスが信じらんない」

すると部屋の扉が開きそこを見るとリニスと朝の人に会いました。

「フェイトこの人が新しい教育係の人、名前はカオス」

「カ…オ…ス」

カオスそれが彼の名前。カオスは私の所まで来て私の目線を合わせてきてじつと私を見ていました。

「……………」

「あつ…………あの？」

するとカオスは

「あと15、6年待ったら付き合ってもいいぜ、嬢ちゃん」

そう言つてカオスは私の頭に手を置き撫でてきました。初めて男の人に触られ最初は気絶するかもしれないと私は思っていました。けどカオスに触られたとき何故か嫌じゃありませんでした。

それが私とカオスの出会いでした。

フ
エ
イ
ト

e
n
d

第2話 出会い（後書き）

どうも作者のハザマです。

フェイト、リニス、アルフの初登場！！イエーイ

やっぱりフェイトとリニスは可愛いぞこんちいくしょー

リニスが消えるの絶対嫌だーと思っているかた感想で書いてくださると嬉しいです。（ω）b

いや作者を消すべきだろと思ったかたは感想で書くと泣きます（T
OT）

勿論普通の感想もどしどし待っています。

次回はついに教育が始まるかも。

第3話 教育係（前書き）

久しぶりの更新

第3話 教育係

カオスは今リニスと一緒にプレシア・テストロッタの部屋にいた。

見た感じではプレシアは体調が悪そうだ。どうせ寝ずに何かしていたのだろう。どうして科学者の奴はこんなに無理をするかね。

「貴方が教育係の人なの？」

声に覇気がない相当無理をしているようだ。

「ああ、カオスだよろしく」

「そう、それじゃあ今日からフェイトに教育をして頂戴」

「おいおい来てそうそう働けかよ、あんた人使い荒いな」

「……………」

「黙るかよ、もう少しお喋りしようぜ」

「私にそんな時間なんてないわ」

「時間なんてこの先一杯あるじゃないか、1日は24時間、秒数で表すと1440秒もあるしかも1年だったら365日で8760時間、秒数だと525600秒もあるこんだけ世界にはまだ時間はあ
るんだぜ」

「私にはそんな時間がないと言ってるの……!」

プレシアは椅子に座りながら俺を睨んできた。あんたの視線は人を簡単殺せそうだな、おいだがそんなんじゃ俺は怯まないぜ

「知ってるけど」

「だったら早くしなさい！！！」

「おお、怖い怖い、解りましたよお仕事すればいいんですよ」

「……………」

「それじゃあねプレシアさんまた来るよー」

カオスとリニスはプレシアの部屋から出て行った。

俺とリニスはフェイトの部屋に向かっている。

「いきなり酷いな来てそうそう働けかよ」

「仕方ありませんプレシアには時間が無いんですから」

「あの人に時間が無いなら休めよ」

「私もそう言いましたがプレシアは聞きません」

「科学者つてのは本当で頑固だな」

「カオスさんは「あつ、それ」えっ」

「カオスさんつての止めてくれ変な気分だ」

「ですが」

「いいから」

「解りましたではカオスこちらがフェイトの部屋です」

「ここが教え子の部屋かどんな奴がいるかな？」

リニスが扉を開くとそこには小さな女の子とその女の子より大きな女いや耳が生えているから使い魔か

「フェイトこの人が新しい教育係の人で名前はカオス」

「カ…オ…ス」

俺は嬢ちゃんに近づきしゃがんで同じ目線で見た。

「あつ……あの？」

なるほどリニスと一緒にいたときに視線を感じると思っていたが女の子のか。それにこの子

「あと15〜6年待ったら付き合ってもいいぜ、嬢ちゃん」

そしてフェイトの頭に手を置き撫でた。

「子供に何を期待しているんですか？貴方は」

「ははは、いいじゃないか、リニス」

そして俺達はそこからずっと喋っていた。

何時間か喋っていたがプレシアから言われていたことを思い出しフェイト達の力がどれほどのものを測るため模擬戦をしようと提案した。そして今広い庭に俺達はある。

「ルールは簡単10分以内に俺に一発でも当てたらお前らの勝ち」

「本当に3対1でいいのかいカオス」

「心配するなアルフ俺が勝つからそうだな、更にハンデだデバイスも無しにしてやろう」

カオスはそう言って自分のデバイスを少し離れた場所に突き刺した。

『旦那俺の出番は無しかよ！！！！』

「ああ、無しだ」

『そんなー』

「ほらこっちは準備万端だぜ」

「舐めてたら怪我するよカオス」

「それ俺の台詞だから」

「フォトンランサー、ファイア」

フェイトは槍のような魔力弾を三つ放ってきた。どれもしつかり魔力が込められていた。

「末恐ろしい、嬢ちゃんだ」

カオスはそれをギリギリでかわした。そして上を見るとアルフが右腕の拳に魔力を込めながら殴ろうとした。

「鉄拳無敵！」

「いいや、残念ながら無敵じゃない」

俺は右腕でアルフの右腕の手首を掴みそのまま左側に投げ飛ばす。

「なっ！！」

アルフは驚いたがすぐに切り替え空中で受け身をとる。

俺はすぐに別の行動をしようと思ったが左腕が引つ張られる感じがした。

「バインド、リニスかだが残念ながらリニスこれじゃあ俺を捕まえることは出来ないぞ」

「えっ！！」

「俺を捕まえたかつたらしっかり捕まえないと俺は逃げちゃうぜ」

「なっあ／／／」

カオスはこんな時にも私を口説こうとしていた。

「まあこれもハンデとして付けといてやるよ」

カオスは片手にバインドを付けたまま私達三人を相手にしようとしている。

「来ないならこっちから行くぜって無理だけだな」

「うおおおお！！！！」

アルフがカオスの背中に殴ろうとしていた。

「今度は当たる！！！！」

アルフの拳は完璧なほど直撃コースを狙っていた。

「確かに普通なら当たるが俺は当たらない」

そう言いアルフの視界からカオスが消えた。カオスはただジャンプをしたただだがここからあり得ない行動をカオスは起こした。

カオスはバインドを付けた腕を軸にしてアルフがカオスの真下に来ると同時にアルフの背中を蹴りフェイトの方へアルフは吹っ飛んだ。

「まだやるか？」

二十分後

フェイト達は滝のように汗をかいていた。

「はあ……はあ……」

だがただ一人だけ涼しい顔をしているものがいた。

「二十分もやってたのか、バリバリ時間過ぎてるじゃん、まあ十分楽しんだからいいか」

カオスだった。

「何で……カオスは……そんな……涼しい顔してんのさ」

「んっ？だつてさっきの模擬戦お前らにとつちや死闘だったかもしれないが俺にとつたらお前らの実力を計ってただけだしな」

「あー、もう何も言えないリニスお腹空いたご飯」

「はいはい」

カオス達はリニスが作ったご飯を食べながら今後の教育方針のことを考えてた。

「うーん、どうするかな？」

カオスは肉を食べながらフェイトの練習メニューを考えていた。

「どうしましたカオス？お口に合いませんでしたか？」

リニスは心配そうな目で見てきた。

「いや、料理の方は超美味いこんな料理初めて食ったぜ、嫁に欲しいくらいだ」

「ッ！そ、そんな／＼／」

リニスは頬を赤くして顔を隠している。こつゆつ反応すると本当に可愛いなと内心思うカオス。

「まあ、考えてたことはさっきの模擬戦での嬢ちゃんとアルフのことだ」

「わっ、わたしの？」

「んっ？」

フェイトはいきなり自分の名前を呼ばれ驚き焦っている。アルフは肉を食べながらこっちを見ている

「なっ、何かさっきの模擬戦で悪かったかな？」

「いや、その逆だ嬢ちゃん。魔法の威力、詠唱の早さそれにスピードどれも一流の魔導師級位だ。ほんと末恐ろしい嬢ちゃんだなと思ったよ」

「そそそそんなことないよ、私なんてまだまだだよ」

「そんなこと言うな少しは自分を誇れ」

そう言うとかオスはフェイトの頭を撫でた。

「あう……………／／／」

フェイトは撫でられるのが嬉しいのか頬を赤くしていた。撫でるのを止めたら悲しそうな顔をした。

「そしてアルフお前は格闘と威力に関しては言うことがないが後先考えずに突っ込み過ぎだ、いつか大怪我するぞ」

「だってさあたし魔法系苦手なんだよね」

「だったら苦手を克服しろなんだったら俺が教えてやろうか？まあ俺が教えられるのは補助系の魔法だけだな」

「ほ、ほんとうかい？」

「ああ」

「それじゃあお願いするよ」

これで今後の方針が決まった。

「よし今後の方針はリニスは嬢ちゃんに魔法を教えてやってくれ、俺はアルフに魔法を教えるってのが今後の方針だ」

「リニス、カオス私がんばるよ」

「はいフェイト頑張りましょうね」

「私も頑張るよ」

そしてカオスの教育が始まった。

アルフ s i d e

私はアルフ、フェイトの使い魔だよ。今私は広い庭でカオスに魔法を教えてもらっている最中。

「アルフ聞いているのか？」

「えっご、ごめんよきいていなかった」

「ちゃんと聞いてくれもう一度言っぞこれから教えるのは補助魔法にとつて基本中の基本バインドを教える」

「はい」

「まあ言葉より実際に見たほうが早い」

そしてカオスは私の左腕に赤色のバインドを発動してすぐといた。

「よしわかったろ」

「いや全然解らないよ少しは説明をしてよ」

「めんどくさいな」

「それでも教育係」

「まあ簡単な助言だ集中力が大事だ以上」

「なッ！わかったよやればいいんだろ」

そして私は集中をした。

「むむむ……………はっ」

確かにバインドは成功したがカオスの頭の上にバインドが発動した。
天使の輪つかみたいだった。

「……………」

「……………俺を殺したいのか？」

私はフェイトの役にたてるのかね

アルフ e n d

第3話 教育係（後書き）

感想待っています

てかマジでリニスどうしよう（・・・）原作どつりにするか助けるか？

こつなったら最後の手段助けてー読者様

第4話 真実と情報（前書き）

更新

第4話 真実と情報

あれからアルフはいろいろな補助魔法を覚えた。多少は失敗するがアルフにしてはよくやったほうだろう。

「はあ、今日も疲れたー」

「アルフにしてはよくやったな」

「あたしだってやる時はやるんだからさ」

「はいはい、じゃあそろそろ戻るか」

「そうだね」

アルフは腰に手を付きながら答える。

俺達が戻ると同時に嬢ちゃんとリニスも戻ってきた。

「フエイト、お疲れ」

「うん、アルフとカオスもお疲れ様」

「ああ」

そして俺達はリニスが作ったご飯を食べている。

「ふーん、嬢ちゃんもそこまで成長したか」

「はい、フェイトは本当に凄いですよ」

「リニス私はまだまだだよ」

「そんなことはありませんフェイトは十分に今頑張っています」

「そっだぞ嬢ちゃん」

カオスはお決まりのようにフェイトの頭を撫でた。

「あう……………／／／」

相変わらずの反応をするフェイト。

「そういえばアルフの方はどうなんですかカオス？」

「アルフか」

アルフの方を見ると期待した目で俺を見ている。

「まだまだだな」

「なッ！カオス」

そして楽しい食事が終わりフェイトとアルフは部屋に戻り眠った。
俺とリニスは二人で話をしていた。

「それではカオス私はプレシアに今日の報告をしてきます」

「いや今日は俺が報告をしてくる」

「えっ、ですが」

「いいからあのとき以来プレシアさんとまともにお話していないから今日は報告ついでお話してくるよ」

「ですが、いえ解りました今日の報告はカオスにお願いします」

リニスは知っていたカオスは一度自分が決めると意地でもそれを曲げないことを。

「OK」

調べたいこともあるしな

プレシアの部屋扉前

「プレシアさん入りますよ」

だが部屋にはプレシアはいなかった。

「珍しいなあの人でも出掛けるときもあるのか、まあ丁度いいか」

『旦那、女の人部屋でガサ入れか』

「ふん」

俺はプレシアの部屋の部屋にある扉に目をつけた。

「ここか」

扉を開くとそこにはプレシアが倒れていた。俺はプレシアの傍に行きプレシアを担ぎ上げ横に視線を向けた。

「やはりここにいたか」

そこにはプレシアの愛娘アリシアが眠っていた。

「嬢ちゃんにそっくりだな」

俺はプレシアをベッドに寝かすためその場を去った。

プレシア s i d e

私は後悔している。何故アリシアとの一緒の時間を作れなかったのか？

私は後悔している。何故アリシアをあの日一人にしてしまったのか？

私は後悔している。何故アリシアだけに不幸が降りかったのか？

私は横に視線を向けるとソファーに座っている人物を見た。片手をソファーの後ろに回し脚を組んでいるのは新しい教育係の力オスだった。

「私は何時間眠っていたの？」

「ここまで運んで来て三時間くらいだったかな？」

三時間以上も私は眠っていたのか待ってまさか彼はアレを見たのだろっか？

「貴方、アレを見たの？」

「アレ？何の事が解りませんねえ」

「ふざけないで」

「……………はい、はいはい見ましたよ貴女の愛娘アリシア・テストタの事でしょ」

「何故そこまで知っているの？」

「今日は随分とお喋りですね日頃からそう「いいから、答えなさい」はいはい、急かす女も嫌いじゃあないからな」

「ある人物に教えてもらったから」

「その人物は誰？」

「それは教えられないな内の組織の個人情報になるからな、その代わり一つだけ良い情報を教えてやるよ」

プレシア e n d

プレシアが起きる一時間前

俺はプレシアが起きるまでソファ―に座っている。正直暇だ。部屋に戻ろうか。すると組織から連絡がきた。相手はジェイルだった。

「よお、ジェイル久しぶりじゃん」

《久しぶりだねカオス》

「どうした俺に会えないから寂しかったか」

《そうだね君がいないと正直寂しいよ》

「……………残念ながら俺にそんな趣味はねえから」

《そうとても残念だよ》

「……………」

《冗談だよ》

「お前の冗談は本気に聞こえるぜ、それで用は何だ」

《用は“伝言”だよ》

「また爺さんの“星読みの書”かよ」

《カオスあまりその言葉を使っではいけないよ》

「解ってるよ」

星読みの書…爺さんが持っている魔術書型のロストログア。半年に一回自分が知りたい情報を知ることができる。（あまり細かい情報は解らない）

「それで何が出たんだ、俺が死ぬってか」

《残念ながら違うよ、君はスクライアー族って知っているかい》

「ああ、流浪の旅をしながら遺跡発掘をしている一族だろ、それがどうした？」

「近い未来彼らが次の遺跡発掘でロストログアを見つけれ、名前はジュエルシード」

「成る程、要はそれが管理局に輸送されるときに襲って奪えつてか」
《いや今回は違うんだ、今の情報をプレシア・テストロッタに伝えるとのことだよ》

「何？」

《簡単に言つと君はこの情報を伝えてその仕事は終わりつてことだよ》

「こいつは上の連中は何かを企んでいるな」

《だろうね、私は内容は伝えたからここで切るよ》

「ああ、Thank youなジェイル」

そこで通信は切れた。カオスと思った。奴等は何かを企んでいると。だがまずは頼まれた仕事をしなければならぬ。

プレシア side

私は彼に先程言われた事を思い出した。

「これが良い情報なのかしら」

「ああ、そうだ」

「何故私にこの情報を？」

「さあな上の連中は何を考えているかは解らんからな」

「そうならこの情報のことは忘れるわ」

私は立ち上がりその場を去ろうとした。

「さっきこのロストロギアの事を調べたら面白いことが解ったよ、このロストロギアの力は全て集めると凄い力が発動するらしいよもしかしたら」

彼は私の背中越しに語っていたが私はその言葉を全て聞いていないだが彼の次の言葉で私はそのロストロギアに興味を惹いてしまった。

「あのおとき話で出てくる“失われた秘術の眠る地アルハザード”に行けるかもな」

私は振り返り

「どうゆうこと？」

だが彼は立ち上がり部屋を出ていこうとする。

「待ちなさい！！」

「プレシアさん知リたかつたら自分で調べたらどうですか？まあ信

じるか信じないかは貴女の勝手ですけどね」

そして彼は部屋を出ていった。私は彼の背中をずっと見ていた。

プレシア e n d

第4話 真実と情報（後書き）

いやー疲れた（-o-;）

感想待ってます

次回予告 遂にバルディッシュ登場お楽しみに

第5話 バルディッシュ（前書き）

短いです

第5話 バルディッシュ

俺達は今デバイスルームにいるどうやら嬢ちゃんのデバイスが完成したようだ。

「リニスこれが」

「そう貴女のデバイス名前はバルディッシュ」

「これは斧なのかい」

「斧であり槍であり全てを断ち切る閃光の刃でもあります」

リニスはそう言いバルディッシュを取り嬢ちゃんに渡した。

「フエイト大切にしてくださいね」

「うん、ありがとうリニスそしてよろしくねバルディッシュ」

『yes ,sir .』

嬢ちゃんは本当に喜んでるようだ。ニコニコして良い笑顔してるじゃないか。これは本当に15〜6年が楽しみだ。

「それじゃあデバイスの使い方でも教えてやるか」

「教えてくれるのかオス」

「当たり前だろ」

「ありがと」その言葉を言うのはまだ早いぞ嬢ちゃん」

「！そうだね」

「ほら行くぞ嬢ちゃんアルフ」

「うん」

「おう」

俺達はデバイスルームから出ていった。嬢ちゃんは確かに優秀だ。だが流石にデバイスを持つたら戸惑うこともあったが直ぐにデバイスに慣れた。何度でも言おう末恐ろしい嬢ちゃんだ。

そして俺がデバイスの使い方を教えて一週間がたった。ある出来事が起きた。

「カオス」

「んっどうした嬢ちゃん？」

「模擬戦しよう」

正直まだ俺は嬢ちゃんにはまだ早いと思った。デバイスの使い方を覚えて一週間まだ教えることはあった。だが嬢ちゃんは優秀だ俺が居なくても勝手に覚えるだろうと俺は思った。だから俺は

「ああ、いいぜ嬢ちゃん」

これが俺と嬢ちゃんのLast模擬戦だ。

第5話 バルディッシュ（後書き）

どうも作者のハザマです

感想待ってます

次回予告 Last 模擬戦そして遂にあの人が……！

第6話 L a s t 模擬戦（前書き）

やはりバトルは苦手だ

第6話 Last 模擬戦

「ルールは最初の模擬戦と一緒にだ10分以内で俺に一発当てたらお前達の勝ちだ、そして10分過ぎたら」

「私達の負け」

「負けられないね」

「まあ俺のデバイスを抜かせるぐらいの強さは見せてくれよ嬢ちゃん」

「カオスお願いがあるんだけど」

「お願い？何だ」

「あの……その」

「あ？」

何をもじもじしてんだ嬢ちゃんは？

「この模擬戦に私達が勝ったら私の事をちゃんと名前で読んでほしいそれが私のお願いなんだけど」

「……………」

「だめ……かな？」

「……………H A - H A - H A - H A - H A、何だそんなことが別にい
いぜ」

「あ、ありがとう／＼／」

「んじゃ、始めるかりニス判定とかは任せた」

「はい、解りました」

「それでは始め！！！」

フェイト side

「それでは始め！！！」

リニスが号令をかけ模擬戦は始まった。

【アルフ、私が最初に魔法を仕掛けたらカオスは必ず避けるからその時は】

【解ってるよフェイト】

「C、mon！」

カオスは私達に挑発をしている。私はムツときたが抑えた。

「フォトンランサー・フルオート…ファイア」

最初は私の得意な魔法で先制を仕掛けた。

「HA！ 少しは強くなったがまだまだだなあ嬢ちゃん」

カオスは私が放った魔法を最初の模擬戦と同じ様に華麗に避けた。
だけどまだアルフがいる。

「うおおおおお！！！」

「おいおい、これじゃあ最初の模擬戦の時と一緒に、あ？」

「カオス忘れてないかい？あの時の私達と違うだよ」

そう今のカオスは両手両足にアルフがかけたバインドがしてある状態。

「そうだな、あの時と一緒になw」「喋る暇があると思ってるのカオス！！！」

私はカオスに攻撃が初めて当たったと思ったがそんなに甘くなかった。

パシッ！！

カオスはアルフの攻撃を左腕で防いだ。

「相変わらずバインドを解くのは早いね」

「ああ、だが残り時間が無かったから両手のバインドしか解除出来なかったな」

「あつ、そ」

ブン――！！

パシッ――！！

アルフの右拳がカオスの横腹を殴るがそれすらも防ぐカオス。

「くっ！」

アルフは少しカオスから距離をとりまた反撃を繰り返す。だが全てアルフの拳は防がれてしまっている。

【フェイト今カオスはあたしに注意を引いてるから今の内に――！】

【うん】

「バルディッシュ」

『yes・sir』

私はバルディッシュを鎌の状態に変えカオスの懐に入り攻撃を当てる。私の速さなら行けるしカオスは今アルフの拳を止めるため両手を使っている。両足にはバインドこれなら攻撃が当たる。

「はああ――！！！」

「！ハッ」

ガキン！！！

カオスはバルディッシュの取手の部分を足で止めた。よく見たら片方だけバインドを解いていた。

「くっ！」

「残念だったな嬢ちゃん！！！」

そしてカオスは足の裏に力を込め

「B l a s t o f f !（吹っ飛べ！）」

「きゃああ……！！！」

「フエイト！！！」

私は空中で何とか体制を直した。

「アルフよ見をしている暇があるか？」

「！？」

カオスはアルフの手首を掴み真っ直ぐ投げ飛ばした。

「くう……！！！」

アルフはダメージを負ったが何とか体制を直したが

「ほら休んでる暇は無いぜ」

カオスはホルスターから二丁の拳銃を取り出し

ダダダダダン!!!

私とアルフに向かって引き金を引いた。私達は銃弾を避けながら戦った。だがカオスに一発も当てられず時間だけが過ぎていった。

「Hey! what's up! (オイ!、どうした!)」

何故カオスはあるのに涼しい顔をしているかは解らないがそろそろ時間が無くなる頃だ。

【アルフ】

【どうしたんだいフェイト?】

【少し時間を稼いでくれないかな?】

【何か作戦があるのかい?】

【うん、いくらカオスでもこれはかわせないと思うから】

【解ったよフェイト私に任せといて!】

アルフはそう言うと同時にカオスの方へ突っ込んだ。私はリニスから教えてもらった術の詠唱に取り掛かった。

「アルカス・クルタス・エイギアス」

「あ？何だ」

「あんたの相手は私だよ」

ブッン！！！！

「疾風なりし天神、今導きのもとに撃ちかけれ」「どうしたアルフ
そんなんじゃ時間稼ぎにならないぞ」

「くう…舐めんじゃないよ！！！！」

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

【アルフ！！！！】

【あいよ】

私はアルフを下がらせた。

「フォトンランサー・フランクスシフト、打ち砕け」

「ハッハー、いいぜかかってこいよ嬢ちゃん！！！！」

「ファイアー！！！！」

カオスは金色の光に飲み込まれた。

ありつただけの魔力を込めてカオスに一斉射撃をした。

この魔法は詠唱にそれなりの時間がかかり、魔力も膨大に消費をしてしまうから絶対に当てる状況を作らなければいけない。だから今回はアルフを囫に使った。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

もう私の体には体力も魔力も残っていない。だけど、この攻撃がもしカオスが耐えていてもかなりのダメージは与えたと思う。それにこの模擬戦のルールはカオスに一発当てれば私達の勝ち。

「やったねフェイト!!」

「うん、だけど本当に当たったのかな？」

「大丈夫だよ、しっかりバインドもしておいたしいくらカオスでもこれはかわせないよ」

「うん、だけど心配」

「まあ、確かにねえ」

確かにカオスに直撃で当たったしかも本気でいつてしまった。今更ながらカオスの心配してしまう。今は煙でカオスの安否が確認できない。

——だんだん煙が晴れてきたの確認してカオスを探したがそこには居なかった。

「カオスが…いない!!!」

「そんな！何処かに吹っ飛んだんじゃない」

「さっきの魔法はなかなか威力だったぞ本当に、未恐ろしい嬢ちゃんだ」

「「なッ!？」」

後方から声がして私とアルフは振り返るとそこには無傷のカオスが立っていた。

「まあ、これくらいの強さなら俺のデバイスを使ってm「プレイヤー」!!!」

「カオス、10分経ちましたよ」

「あ？何だもう経ったのか早いな」

私は不思議だった。何故カオスは無傷で居たのか。

「な、何で!? 無事なの!?」

「そ、そうだよ!？」

「あ？ 何で無事か？ それは教えられないな」

「多分ですけどカオスはレアスキル（稀少技能）を持っているじゃないですか？」

「レアスキル持っているのカオス！？」

「あ？ まあそんなもんだな」

「なんだい歯切れが悪いねえ？」

「気にすんな、俺は少し休むから」

そう言うとカオスは後ろを向き歩いて行き。

「A d i o s L a d y（じゃあな、嬢ちゃん）」

それが私の最後に聞いたカオスの言葉だった。

フェイト e n d

今日の模擬戦は時間切れで両者とも引き分けて終わったがそのまま続けていたらフェイトは間違いなく負けていた。

そして今日解ったことはカオスはレアスキル（稀少技能）の持ち主だということが解った。どんな能力かは解らないがフェイトの必殺技を無傷で居るので凄いい能力を持っているしか解らない。

最後にカオスが言った一言「A d i o s L a d y」と言う一言が私は何か引つ掛かった。

食事の時間になってもカオスが帰ってこなかった。フェイトとアルフが凄く心配をされていて私は今に解ったカオスのあの言葉は私達への別れの言葉だと、まだ彼にはここに居て欲しかった私は今日一杯で消えてしまう。私が消えたらフェイト達は悲しむだろうだからカオスは私の代わりとしてフェイト達の傍に居て欲しかった。

——私は今お城から少し離れたところに居ます。どうやら私はもう消えてしまうようです。

私はプレシアに感謝しています。プレシアのお陰で頑張りやだけど悲しいことがあると泣いてしまう女の子フェイトに会えました。がさつだけど優しい使い魔アルフに会えました。そして最初は怖いイメージでしたが凄く優しく私に初めて恋をした青年カオスに会え

ました。

ここでの思い出は一杯です。そして最後の私の我が儘は彼に……カオスに会いたい。

「よう、こんなところで何してんだリニス」

後ろを振り返るとそこには笑みを浮かべたカオスが立っていた。

リニス e n d

第6話 Last模擬戦（後書き）

感想待ってます

次回予告 別れ

そして後書きに何かが起こる……！

第7話 別れ（前書き）

テスト期間で更新遅くなりました

どうもすみませんm（――）m

そして予告した通り後書きで何か起こる（笑）

第7話 別れ

「どうしたリニス？」

リニスは俺を見て驚いた顔をしていた。

「なっ、何故貴方がここに居るんですか？」

「なんだよ、俺がここに居たらいけない理由があんのか」

「だって貴方さっき私達にさよならって言ったじゃないですか」

「さよなら？そんなこと言ったか？」

『旦那、あん時だよ模擬戦が終わった時』

「模擬戦が終わった時？あゝ、あん時か」

カオスはついさっきのことを忘れていた。

「確かに俺はあの時点で仕事が終わりに帰っても良かったんだが、まだ答えを聞いてないから帰ってきた」

「答え？」

「おいおいリニス自分だって忘れてるじゃねえか」

リニスは手をを顎につけ考える素振りをして一分カオスの答え言ってるを考えたが帰ってきた言葉が「すみません、解りません」だっ

た。

「まあ仕方ないかあれから一年もたったしな」

「それで答えとは何ですか？」

「ほら、俺とリニスが初めて会った時を思い出してみろ」

「私とカオスが初めて会った時？」

「ああ、初めて見たとき可愛いなと思った、どう俺と付き合わない？ってな」

「……………//」

リニスはどうかやら思いだしたようで顔を赤くしてカオスに見えないように顔を下に向けて数十分顔を上げカオスの方を見て

「少し私のお話に付き合ってもらえますか？」

と言ってカオスは

「ああ、いいぜ」

と答えた。

二人は歩きながら話した。

「私凄くフェイトが大好きです」

「そうか」

「フェイトは凄く頑張りやさんで優しく強い子です、けど本当は顔には出さないけど寂しがつています」

「だろうな」

「フェイトの今の年頃は友達をつくり、その友達と遊ぶ年頃です、そして親にも甘えたい年頃でもあります」

「……………」

リニスは涙を流しながら言葉を吐き出している。その姿をカオスはただ黙って聞いていた。

「実は私、プレシアに……………嫉妬していました……………フェイトが私の子供だったら……………この手で抱き締めてうんと可愛がっていました」

「……………」

「ですが私は……………プレシアの使い魔です、けど私プレシアに感謝しています、もしプレシアが私を使い魔として……………選ばなかったらフェイトとアルフにも出会えなかったです」

「……………」

「可笑的ですよね……………嫉妬している相手に感謝って本当に……………可笑的……………です」

リニスは涙を流しながら笑顔を作っていた。

そして、リニスの体が少しずつ光に包まれていく。

「行くのか？」

「……はい」

「H A……………まだ答えを聞いてないのに行っちゃうのか？」

「フフ、そんなに知りたいですか？それじゃあ一つだけお願いを聞いてくれたら教えます」

「お願いじゃなく遺言じゃねえかそれ？」

「どうしますか？」

俺はやれやれと両手を上げ

「まあ遺言じゃあ仕方ないな、いいぜ、リニスの言うお願い聞いてやるよ」

「ありがとうございます、私のお願いわ」

リニスは笑顔で

「フェイト達を守ってあげてください、それが私からのお願いです」

こんなときでも嬢ちゃん達の心配か……まあリニスらしいがな。

「いいぜ、嬢ちゃん達を守ってやるよ」

「ありがとうカオス、そして……これが――」

リニスはゆっくりカオスに近付き

唇を重ねた。

「――んっ……………これが私の答えです」

唇が離れて

「HA、まあまあだな」

「酷いですね、私のファーストキスがまあまあって」

怒ってはいるがリニスは笑顔で言っている。

「そろそろ行きますね」

「ああ」

リニスの視線はカオスからフェイト達が眠っている寝室に向けられる。

「さよなら……可愛いアルフ、愛しいフェイト」

「さよなら……私のご主人様」

カオスに視線が戻り

「さよなら……私の初めて恋をした人カオス――」

そう言つてリニスは笑顔で消えた。

リニスが消えた所をカオスは見つめ呟いた。

「……………俺って女運ないな、そう思わないかプレシアさん」

そうカオスは言つて後ろからプレシアが現れた。

「リニスは行つたのね」

「ああ、行つたよ」

プレシアは俺の顔を見ずにリニスが消えた場所を見ていた。

「悲しいなら少しは表情を変えたらどうだプレシアさん」

「悲しい？別に悲しくないわ、貴方こそ“仮面”を外して本来の顔をだしたら？」

「あ？なんだバレてたのかよけど俺はまだ“仮面”を外すきはないぜ」

カチャ

カオスは自分の愛用の拳銃を後ろを向いているプレシアに突きつけた。

「何のつもり？」

「何のつもり？って自分でも解っているだろ、組織はあんたが邪魔だと判断すると俺はあんた殺すように命令されるってことおな」

「ええ、それくらい解っているわ……………一つだけ聞いていいかしら」

「なんだ？」

プレシアはカオスの方を向き。

「貴方は本当に命令だけでその引き金をひくき？」

「どおゆう意味だ？」

カオスはわざとプレシアに聞き直した。

「……………貴方は命令だけで動く人形なのかしら？」

「……………」

カオスは表情を変えずただプレシアの言葉を聞いていた。

「貴方は命令だけで動く人形じゃないはずよ、貴方のその引き金は命令と言つ言葉で引くのではなく私情と言つ言葉で引くのじゃなくて？」

「…………… H A ～、正解だプレシア・テストロッタ、よくわかったな、何でわかった？」

「勘よ」

本当に勘で当てたのかよ、科学者お得意の観察じゃないのか！

「何言いたいことがあるのならいったらどうなの？」

「…………… じゃあ一つだけ教えてほしいことがあるんだが？」

「何？」

カオスは少し間をあけて口を開く。

「あんたはまだ生きなければいけない理由があるか？」

「……………」

プレシアは黙ってカオスを見ている。ただ長い沈黙が流れた。

そしてプレシアは腕を組口を開く。

「ええ、私はまだ生きなければいけない理由があるわ」

「……そうか」

ドォーン

そして――

カオスによって――

引き金が引かれた。

今カオスはいつもフェイト達と一緒に食事をしていた、テーブルに座っていた。

テーブルに手を置いて目をつぶり思い出を懐かしむかのようにただじっとしていた。

それから数分後カオスは目をあけて立ち上がった。

そしてフェイト達が寝ている部屋の方へ向き

「A d i o s L a d y」

そしてカオスは音も無く消えた。

プレシア s i d e

ドオーン

彼は引き金を引いたが私に向かってじゃなく空に向かって彼は引き金を引いた。

「何故って顔をしているな」
当たり前だった、さっきまで私に殺気を当てていたのが一瞬に消えた。

「理由は二つだ、一つは俺は組織からあんたを殺せと言う命令は受けていない」

何故、組織の連中は私を始末をしないのだろうか？

何か理由があるはずだ。

「もう一つは、あんたを殺しても消えた人間は戻ってこない以上だ」

消えた人間、多分彼はリニスのことを言っているのだろう。

「それだけで私を生かすの？」

「ああ」

そして彼は後ろを向いて

「最後に言つとくがあんたのしていることは間違っている、死んだ人間は戻ってこない」

そう言つて彼は私の前から消えた。

私のしていることが間違っているですつてふざけないで貴方に何がわかるって言うのアリシアを失った私の気持ちが！！！！

だから私は――

「アリシアと共にアルハザードに行く必要があるの」

プレシア e n d

第7話 別れ（後書き）

ハザマ「第一回ハザマのお〜」

リニス「アヴァロン（理想郷）へようこそ」

ハザマ「司会者はハザマと」

リニス「リニスでお送りします」

ハザマ「いや〜、始めました俺のアヴァロン!!!!」

リニス「この企画ではたまに原作なのはゲスト（キャラ崩壊あり）を呼んだりして質問したりただお話する企画です」

ハザマ「勿論、他の作品で活躍している人達のコラボもどしどし募集中だ!!!!」

リニス「コラボしたいと言う方は感想でお知らせください」

ハザマ「勿論、感想だけでもいいぜ」

リニス「……………」

ハザマ「ど、どうかしたリニス（。A。;:;）」

リニス「いえ、こんなことしても感想増えるのかが私は心配です」

ハザマ「（・・）エッ……………」

ハザマ「だ、大丈夫だよ、読書様は優しいから（；、Д、）」

リス「次回 管理局 皆さん次回も見てください」

ハザマ「（；、Д、）本当に大丈夫だろうか？ この小説」

第8話 置き手紙（前書き）

遅くなつてすみませんm（――）m

第8話 置き手紙

フエイト side

私は今、時の庭園を走り回っている。なぜ走り回っているかと言うとカオスとリニスがここにいないからだ。

今日の朝起きていつもみんなで集まって食事をする所に一通の手紙があった。

私はその手紙を取り宛先を見たらカオスからだった。私はその手紙を開いて中身を見た。

「じゃあなAdios」としか書かれていなかった。

私はリニスにこのことを伝えようとリニスの寝室に向かったが寝室にはリニスは居なかった、そして寝室には何もなかった。

リニスの部屋にはリニス自身あまり物は置いては居なかったが今の部屋には何も無い状態だった。

「……………うつ、うあああああん」

私はそこで倒れ泣き崩れた。

あのあと私は泣き崩れた声でアルフに見つかってアルフに慰められた。

そして泣き止んだころに母さんに呼ばれて全てを話してくれた。

リニスはお休みを貰って遠い所に行ったそうでカオスは教育係の期間が終わったから帰ったと私は聞かされた。

そして母さんの話はそれだけではなかった。

母さんの話は終わり部屋から出た。話の内容はある物を取りに行くお使いにだった。そのある物は母さんの研究に必要ならしい。

正直話を聞いて納得しなくなかったが納得しなければならなかった。けど永遠に会えない訳じゃないいつか二人にきつと会えるはずだから。

「だから、私が頑張れるように応援してね、リニス、カオス」

フェイト e n d

第8話 置き手紙（後書き）

ハザマ「第二回ハザマのお」

リニス「アヴァロン（理想郷）へようこそ」

ハザマ「司会はハザマと」

リニス「リニスでお送りします」

ハザマ「そして読書様に謝ることが2つありますm（――）m」

リニス「今日の作者はずっと土下座でお送りします？」

ハザマ「（・・）エッ・・・・・・・・？ それきつ「お送りします
？」はいm（――）m」

ハザマ「まず1つはずっと休んですみませんでしたm（――）m」

ハザマ「そしてもう1つは次回予告で管理局と言っていましたが間違
いでしたm（――）m」

ハザマ「そして自分考えましたこれからは毎週月曜日に1話ずつ貼
るうと思います」

リニス「本当にちゃんとしてくださいね？」

ハザマ「はっ、はい！！！！（リニスさん怖いよ（T―T））」

リニス「次回 作者死ぬ 皆さん次回も見てくださいね」

ハザマ「僕はしにましえーん 次回 管理局 皆さんこの小説を応援してくださいと嬉しいです」

リニス「それではまたお会いしましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7025v/>

魔法少女リリカルなのは ～ 黒衣の死神 ～

2011年11月12日08時56分発行